

シビルの原点とその系譜 —平成 29 年度総会特別講演の紹介—

CNCP 常務理事 **皆川 勝**
(東京都市大学工学部都市工学科教授)



本年度の CNCP 総会が 10 月 7 日（木）、土木学会講堂で開催され、特別講演として、国立文化財機構東京文化財研究所 保存科学研究センター近代文化遺産研究室長で土木学会オンライン土木博物館館長の北河大次郎先生に標記のタイトルでご講演をいただいたので、その概要をご報告する。

わが国における「土木」の用語は、国土・郷土を含む「土」と、材料としての「木」からなっている。一方、西洋を見ると、イギリスではじまった「Civil Engineer」という呼び方は、ドイツにおける「建設技術者」、フランスにおける「道と橋の技術者」と異なってむしろ例外的である。イギリスでは、Smeaton が 1750 年頃に「Civil Engineer」の呼び名を使い始めたが、当時は機械技術者や電気技術者を含む、民生に関わる技術者として用いられ、1818 年、「Institution of Civil Engineers」（以後、略して ICU）が設立され、更にその後、フォーラムと称して Engineering は様々な分野に分化していった。フランスは、1747 年に「Ecole Ponts et Chaussées」（写真は当時の様子）を設立し、1829 年には「École Centrale」が設立された。前者は技官の養成を、後者は民間技術者の養成を目的とした。



西洋におけるこのようなシビルの源流に対して、日本においては古代から近世にかけて、さまざまないわゆる「土木家」が人民救済・領国経営などを目的とし、マネジメント技術・民間活用などを含みつつインフラ整備に尽力した歴史を有する。行基に代表される古代の僧、信玄・秀吉・徳川家によるさまざまな事業がそれにあたる。

このような歴史を有するわが国の土木の流れと、西洋におけるシビルの源流は、明治維新後の文明開化の中で交わった。特に、わが国の近代土木界を代表する古市公威の「École Centrale」への留学と、帰国後のその教育理念のわが国への移転の努力、さらには Dyer に代表される西洋からのお雇い外国人の貢献によっている。西洋における Civil Engineering が、経験主義の限界を脱し、実学として成熟していったプロセスを踏まえて、経験と理論に基づき、またさまざまな分野・領域の知見を駆使して課題を解決するわが国における Civil Engineering の誕生を迎えたのである。



1947 年フランスに設立された
Ecole Ponts et Chaussées

このような歴史の流れを踏まえて、これからの Civil Engineer (土木技術者)はいかにあるべきかを論じられた。すなわち、国土づくり、まちづくりは、国の意思と市民（国民）の意思が乖離した時に、不調和がおこる。幕末明治から第二次世界大戦、高度成長期の量的な充足・豊かさを求めた時代から、量的な豊かさを実現した後はどのように社会に貢献をするのか、文明の担い手としてのあり方を考えるべきである。その意味で、市民と社会について、改めて考えることが必要である。国の意志と市民・国民の意志との乖離が大きくなるないように、文明の担い手としての考え方・市民との関りを考えてゆかなければならない。これからのわが国は、市民の多様性を踏まえ、斬新的な進歩を目指すべきであって、公正な意見を育み、近世以前の伝統にまでさかのぼって考えることにより、異分野・市民・国際など多様な視点で連携を重視した Civil Engineer（土木技術者）が求められている。